

子どもと保育の情景 (6)

心をつなぐコミュニケーション

戸田雅美

幼稚園は子どもと子どもが出会うところである。

人と人が出会うと、多くの喜びも生まれるが、葛藤も生まれる。子ども同士の間でも同じである。生まれてからほんの数年しか生きていないにもかかわらず、子どもたちが、人間関係の葛藤をコミュニケーションによって解決していくという事実は、考えてみれば素晴らしいことである。しかし、一見、コミュニケーションによって互いに話し合っ解決したかに見えても、それは単に言葉のマジックに過ぎないということもあり、子ども同士で解決できたこととして済ま

せてしまっよいかと思うことも多い。逆に、保育者が介入することによって、保育者の意向に沿う形で話が進んでしまい、本当の意味では子ども同士のコミュニケーションは成り立っていないという事態もよく起こるので、心ある保育者はますます判断に迷うことになる。

五歳児の五月のことである。この日、ちあきとまりこは、忍者ごっこをしようということになり、二人で手裏剣を作り始めていた。そこに、日ごろまりこ仲

の良いさくらが「入れて」と言ってきた。けれども、ちあきは「だめ」と言い、二人だけで遊びたいようだった。ところが、しばらくして今度はちあきと仲の良いれいこが「一緒に遊ぼう」と言ってきた。すると、ちあきはまりこには何も聞かずに「いいよ」と答えた。その上、ちあきはまりこに「ねえ、やめてくれる？」と言い出した。さすがにまりこが「いやだよ」と言うのと、頼むような口調で「お願い！ やめて」と言う。

この成り行きを見守っていた担任は、「自分の仲良しのれいこが来た途端に、今まで一緒に遊んでいたまりこにやめてもらおうとするなんて、あんまり勝手すぎる！」と感じた。実は、担任がそう思った背景には、ちあきが日ごろ、言葉で自分に都合のいいように進めていくことが多いように感じていたこともあったらしい。このときは、担任が間に入ってじっくり話し合えるように思ったという。

担任が来てくれたことで安心したのか、まりこはち

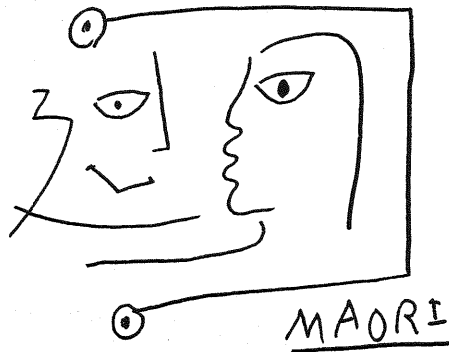
あきに「なんで、れいこちゃんだけは入れてあげるの？」と言い出した。ちあきは、担任の存在が気になる様子で、「さくらちゃんが『入れて』って、私に言ってくれないから」とか「本当はさくらちゃんも入れてあげてもよかつたんだけど…」などと、あれこれと答えていく。次々と言われると、まりこは困った様子で思わず黙ってしまう。

そこで担任が、「でも、まりこちゃんのことも『やめてくれる？』って言ったんでしょ？」と聞く。その言葉を聞くと、自分が悔しかったのはそのことだった…というように、まりこは「どうして『やめて』って言うの？」「なんでまりこまで『やめて』っていうの？」と、堰を切ったように、気持ちをちあきにぶつけていった。すると、ちあきはまりこに言われてつらくなったのか、まりこをにらむように見ながら「まりこちゃんは、ちあきのが嫌いなんだ！」と言う。

そう言われると、まりこは少しひるんだような表情に

なった。そんなことが言いたかったわけではない、ちあきちゃんが嫌いなわけじゃない、と言いたいのかもしれないが、まりこはなかなかそう反論できずにいるようだった。

そこで担任が再び、「どうして一緒にやっていたまりこちゃんにまで『やめてくれる?』なんて言ったの?」と聞いた。すると、驚いたことにちあきは「れいこちゃんが『やめてもらおう』って言ったから」と答える。担任は予想外の展開に、れいこに「れいちゃん言ったの?」と聞くと、れいこも「言っちゃった」と言う。担任が「どうして?」と尋ねると、「ちあきちゃんが『やめてもらおう?』って聞いたから、『やめてもらおう』って言っちゃった」と言う。担任が「ちあきちゃんが『やめてもらおう?』って言ったんだ?」とれいこにもう一度確かめると、すかさずちあきが「ちがうよ! れいこちゃんが最初に言ったんだよ」と強く言う。すると、その言葉を聞いたれいこがびっ



くりしたように、ぱっとちあきの顔を見る。どうやら、れいこは事実を正直に話しているらしい。れいこの顔には驚きがいっぱいだった。

担任は「れいこちゃんが、ちあきちゃんのことびっくりして見ているよ。『どうして?』って思っているのかな。れいちゃんとちあきちゃん、すごく仲良しだよね。ちあきちゃんのこと大好きって思っているれい

「こちゃんが、じーっとちあきちゃんのこと見てるよ」とちあきに話す。すると、ちあきは、自分の顔を見つめてくれるこの顔をじっと見ていたが、「私が最初に言ったの」と言つて、ぼろつと涙を流した。

担任はこのとき、ちあきが本当に大好きだと思つているれいこだからこそ、この表情が、ちあきの心に響いたのだらうと言ひ、大好きだと思える友達がいることつて素晴らしいことですねと語つてくれた。

この担任は決して、誰とでも仲良く遊べるのがよいと思つてはいない。むしろ、二人だけで遊びたいという気持ちも尊重すべきだと考えている。また、途中からほかの子を入れてしまうことでそこまで積み上げてきた遊びのイメージが壊れてしまうことがあることは理解しており、今は入れてあげられないという子どもの思いにも共感している。

ここで担任がこだわった問題は、本当に子ども同士

が納得できるようなコミュニケーションができることである。五歳児になれば言葉によるコミュニケーションがかなりできるようになってくる。とはいふものの、言葉では押し切られてしまう子どももあれば、言葉で押し切つてしまった経験が重なることで、相手の思いに気づくチャンスを失つてしまつている子どももいる。五歳児の春は、まだまだそんな時期である。

相手の様子や表情に、言葉にはすることができない、しかしとても大切な思いが表現されているのが、人と人とのかわりである。保育者の在り方が、人と人との心をつなぐコミュニケーションへと、子どもを誘うものであることを感じる場面であつた。

(東京家政大学)

☆この事例は、台東区立大正幼稚園の研究紀要『心をつなぐコミュニケーション』所収。